
東方稻子神

アポリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方稲子神

【Nコード】

N8030Y

【作者名】

アポリオン

【あらすじ】

どうもアポリオンです。メインの「とある死神の娯楽遊戯」が行き詰ったので、気晴らしにちまちま更新していきます。いわゆる東方の短編集です。

そつだ、牛乳を飲もう その1（前書き）

内容には全く関係ありませんが、最近この二人が愛し合ってれば世界が少しは平和になるんじゃないかって気さえしています。

そうだ、牛乳を飲もう その1

がりがりがりがりがり……

「ムラサ、ストップ」

縁側で足をぶらつかせながら噛むことおおよそ30分。かじっていたら肉まで届きそうだった。

私はイライラすると爪を噛む癖がある。爪を切る必要がないくらいに噛む。

もう何年ちゃんと切っていないか分からない。おかげで先っぽはいつもガタガタ。でもそのうち自然と削れて丸っぽくなってくから困らない。

だけどイライラしてなくても無意識に噛む癖がある。だからホントにいつもガタガタ。

「これダメだって……私が切り揃えたげる」

「いや、別に困ってないからいいわよ」

ぐいと手を掴まれ引き寄せられる。顔近い、顔近い。

「だあめ。私が許さない。女の子なんだから指先にも気い使っとこよ」

「そういうのとか、あんま興味ないし」

「だあーめ。ムラサがよくても私がいくくない。可愛くしたげるって」

余計なお世話だ。私は海に生きた女。そして今は聖と仏に仕える身だからそういうのはいらぬ。

私自身、もともと興味ない。男を誘惑するための飾り付けなんて私はいらないのだ。余分なことはしたくない。まっすぐに、清く正しく、まじめに生きていけばいい。

「何でそんなことするのよ」

「ん？ 好きだから」

いつつもそうだ。私にちよっかいかけてばかり。世話焼き。おせっかい。

何で？ って尋ねればいつつも決まって「好きだから」。悪戯の免罪符みたいと言わないで欲しい。

仏頂面だったりニヤケ顔だったり。そんな軽々しく挨拶みたいに言う言葉じゃないんじゃない？ 知らないけど。

何考えてんだか。まったくもって正体不明。いや意味不明。

私は好きって感情なんて分かんないからいつも困る。困惑して、戸惑って、面倒になって考えるのをやめる。

ヤツは可愛らしいピンクの小さな爪切りを持ってきた。ほら、手出してと催促されて反射的に手を差し出す。

エスコートでもするみたいに恭しく握られて手のひらにキスされる。髪の毛が当たってこそばゆい。

「私のこと、ちゃんと見てくれますように」

「今こうやって見てるじゃない……」

「それは違うよムラサあ」

手首のあたりをざりざりと舐めてきたので叩いて躡けた。

まったく舌が動物なら行動まで動物なんだから。だったら叩いて躡

ないと。

「そういう悪戯はいいから。そんなんするなら私、席立つわよ?」

「いや、ダメダメ。そんな手してたら自分引っ掻いちゃうでしょ?」

「引っ掻かない!」

「腕のどこ、かさぶた作ってるのに? ほうら、大人しく切られち

やえばいいのよ!」

ぱちん、ぱちん。と白い半月が飛んでいく。噛み切れず残った部分が綺麗に丸く切り取られてく。

あれってどこに行っちゃうんだろっね。目で追ってても分かんない。見失う。あ、床に落ちた。これ踏むと足痛そう。

鼻歌まじりに手際よく切っていくコイツが恨めしい。しかも無駄に上手いから余計腹立つ。

鼻歌に合わせて羽が動くからそれを眺めて目玉をきよきよる。ぐるんと一回転。

何でこんなヤツに好きに爪切らしてんだろっ。この手をぴっと引っ張って逃げたらいいじゃない。

いや、違うよ。逃げる必要なんてない、ただ帰るだけでしょ。自分の部屋戻って後片付けの続きとか。

台所でおゆはんの支度とか、庭先の洗濯物取り込んだりとか。やることはいつくらかでもあるんだし。私だってヒマじゃないし。

離して、離してよ、離せよ、この……

「ぬえー!!」

「ん?」

「……早くして、じゃないとまた噛んじゃう」

「ん、了解であります船長!」

こういうときだけ調子乗らないで欲しい。なーに笑ってんだか。爪の断面をやすりでしゃこしゃこ削られる。白い粉がいつぱい飛ぶ。いけないお薬みたい。

指の腹でいっこずつ触って削れたか確認してる。早くしてよ。イライラするんだから。

足の指を閉じたり開いたりしたり、擦り合わせたりして居心地の悪さを紛らわす。

上を向いて、天井の木目を数えてやりすごす。私は何にイライラしてるんだろう？

たぶん私にしてる。というか何でか分からないことに分かんなくて、分かんないからイライラしてる。

……自分の分かんない考察が一番分かんない。

聖とかの前ならこんなことならないのに。じゃあコイツのせいね。決めた。私なんかの相手してるヒマ妖怪にイライラしてる。

「ムラサの爪って綺麗…ほら、まっすぐにピンと伸びてて歪みがない。表面も削ったらこんなにピカピカになったよ！」

「うえ？」

「いいなー惚れ惚れしちゃう。じゃあ反対もね。これ終わったらマニキュア塗ろうねー」

「い、いやだっ！」

そんなの……かじれなくなっちゃっ……！

「ふふん」

コイツの真つ黒いマニキュアを塗った指が私を掴んで離さない。

じったばったと暴れても余裕の表情でぱっちゃん、ぱっちゃん。妖怪ってこんなに力強いんだ。

にひひと笑う口から覗く牙を何とかへし折ってやりたいと思つて、作戦を練ろうと思つて、大人しくした方が得だと思つて、だから静かにした。

私の爪がなくなつていくんだからコイツの牙もなくなつてもいいはず。また生えてくるんだし、いいでしょう？

表面を目の細かいやすりを使い、至極楽しそうに削っている。粉を払うためにふーって息を吹いて最後に手で払われた。

表面を触つては満足そうに笑つてる。真っ黒いマニキュアと、真っ黒い服、真っ黒い髪。いやだ。

「……黒はいやだからね」

「そんなに私のこと嫌い？」

「……………」

「じゃあ、好き？」

「まさか！」

私に分かるはずがない感情を、よりによってコイツになんて。

「じゃあさ、これ塗ろう。透明でラメ入りで可愛いよ。あんまり派手じゃないしこれならムラサもそんなに抵抗なくできるんじゃないかな」

だつて塗るの初めてでしょう。つてクスクス笑つてる。馬鹿にされた。きらきら光る小瓶を揺すつて、羽が楽しげに躍っている。

分かった、やつぱり嫌いだ！ だつてだつてこんなにもイライラする。嫌いよ！ 似合うなんてお世辞言つても騙されないからね。

「黒なんて、嫌いだあ……………」

マニキュアは、つんとアルコールの臭いがする。あんまりお酒好きじゃないからこの臭いも好きじゃない。

いや、あのお酒は好きんだけどあんまり強くないから、つまりまあお酒は好きじゃない。とも言える。かもしれない。という負け惜しみ。

「サクツと塗ってよね。貴重な時間なんだから」

「私たちにとって時間なんてあるようで無いものでしょう？」

「違うわよ、ちゃんと人としての感覚は忘れちゃダメだって聖言ってるじゃない。私含めてアンタ以外、みんな規則正しく生活してるわ」

「私は好きなことしかしたくないから、みんなと時間合わせてないんですー。あと夜行性なので」

そんなの言い訳にしていいいわけない。

夜行性っていうなら星やナズだって本来そうだろうに。一輪だって雲山だって妖怪なんだからほんとに夜が得意なんだ。

それを何十年、何百年という歳月をかけて修正してきた。コイツにだってできるはず。

なのに自らの意志で不規則な生活をしてるなら論外。もう勝手にしてくれ。

聖が優しいのは知ってるし良いことだけど、何でこんなへんちくりんを一緒に住まわしてるんだろ。

こんなのだったらよくその辺をふらふらしてる傘の子の方がいいんじゃないの？

「アンタなんでこの寺いんのよ」

「だから、ムラサが好きだから」

これしか言えないの？ 悪戯がバレたときの言い訳ってたくさん考

えないのかしら。

ぐるんぐるん脳みそが混乱してる。コイツと喋ると疲れる。そうしてる間にもせつせかマニキュアが塗られていく。

私の爪が今までにないくらいに、キラキラって輝いていた。あかぎれ、まめ、切り傷、擦り傷なんか常だった手に似つかわしくない爪。

さっきまで噛んでたなんて信じられないくらいにキラキラでピカピカだった。

……なんだかちよっぴり、こういうのも悪くないかもね。

「ささくれもいっばいだね……これ自分で剥いてるでしょ？」

「だって噛むと皮膚はがれるし。それ邪魔だし。イライラするし」

「もっと自分大切にしなよ」

「どうせ死なないからいいのよ」

もう死んでるし。幽霊だし。なのに妖怪だし。というか爪とかささくれくらいで如何にもなんないし。

腕ぶつちぎれても時間経ったら治るんだから。私たちはそういう存在でしょう？

「私が嫌だから。やめて」

「なにそれ……勝手にすぎる」

「はいはい、何とでも言っておきな。塗れたから10分くらい動かさないでね」

ぼふつと私の胸に飛び込んで言った。

最後の方はもごもご言っておあんまり聞き取れなかった。え？ なにしてるの？

「柔らかい。あつたかい。ぱふぱふ、ぱふぱふ」

「ねえ……今度、風呂入るときは気をつけなさい。知ってるかしら。生物はたった洗面器一杯の水だけでも溺れることができるのよ?」

「それは怖いね」

そのあとも爪が乾くまでの約10分。コイツは私にしがみついていた。だから最後に一発叩いておいた。

躰はちゃんとしないと。というか、ほんとに沈めてやろうかしら。

そのあと台所におゆはんを作りに行った。

先に一輪がいたから申し訳ないなって思いながら手伝ったけど、何だかいつもと違ってやりにくかった。

変わっていかないといえは変わってないけど、気になって仕方ない。手をわきわきと動かして、意味もないのに陽に透かしてみた。ガタガタの部分はきれいさっぱり無くなっていて、かわりにピカピカの指先があつた。

爪が短くなつて困ることがある。袋を開けるのがやりにくい。気になつてしょうがない。

なによりもかじれない。一度かじつてみたが妙に苦くてやめてしまった。

でも。写経をするとき、筆を握つても痛くない。皮膚をぼりぼり掻いても血が出ない。頭洗うのが下手な私は爪を地肌を立てて洗うが今日は?

「痛くない……」

イライラしたから、これからはアイツのおゆはんには嫌いな野菜をたっぷり入れてやることにする。ざまみろ。

そっだ、牛乳を飲もう その1 (後書き)

最初はメインでも活躍中のぬえとそのカップリング相手のムラサのおはなし。

そつだ、牛乳を飲もう その2

命蓮寺の朝は早い。

日の出と共に起床。冷たい水で顔を洗って、湯を沸かして。朝のお勤めの準備。あくびを噛み殺して今日もがんばる。

ほうら、こうしてる間に本堂にみんなが集まってくる。ぴっしり衣服を整えた聖とそれにびったりくつつくみたいにして来る一輪。

髪が跳ねている星は尻尾を隠し忘れていて歩きたんびにゆらゆら揺れて、ご主人の髪を直そうと甲斐甲斐しくびよこびよこ飛ぶナズーリンに当たりまくっていた。

ああ、もちろんアイツはいない。どうせ今頃お腹出して寝てるに違いない。

「みなさん、おはようございます。今日も新しい日を迎えることができました。感謝しましょう。そしてまた一日、安らかに過ごすごとができますように」

はいっ！！

朝の澄んだ空気に凜と響く聖の声で、挨拶で、今日も一日がはじまるのだ。

大体2時間くらいのお勤めを終えてやっとな朝食にありつく。

酸っぱいもずくがおいしかった。疲れがとれる。よく浸かってるதாகあんでご飯3杯は余裕。

つやつや白飯って噛めば噛むほど甘くなってお腹もいっぱいになる。だから口を閉じてしっかり咀嚼。1、2、3……ごっくん。

シヤケの塩加減がいいあんばい。小骨はペツてした。でも皮は食べる。身と皮の間に、絶妙なうまみが詰まってる。

お味噌汁のわかめと豆腐があっさりで、味噌のコクがたまらない。あつたかくてお腹に優しい。ぬくたまる。

黄色のふわふわ卵焼きが最高。今日はだし巻き卵だったから、明日は甘い卵焼きだ。明日も楽しみ。

早起きでお勤めして、今日もメシがうまい。ごちそうさまでした。幸せ補充、完了。

「ねえー。一輪てさ、何で聖好きなの？」

「急にどうしたのよ？」

かちやかちやと食器をぶつけながら二人でお片付け。

他のみんなは次の行程に進んでる。私はこれが終わったらアイツを起こすだけの簡単なお仕事。

アイツもみんなと一緒にご飯食べたらいいのに。温め直したらあんまりおいしくないのよね。

一人分だけ残った食器とおかずをちよいと寂寥感。と同時に片付けが進まないということに物憂い。

「その好きは、どんな『すき』なの？」

「お付き合いしたい方向での好き、かしら」

答える間も手を休めることなくせっせかお片付け。洗い上げた皿の水気を切って拭いていく。

流しも綺麗に洗って、でた生ゴミを袋に入れてぎゅっとしぼる。…

…やっぱり、爪が気になってしょうがない。

「付き合ってなにをするの？ 今もほとんど一緒にいるのに」

「一緒にいたいし、手繋ぎたいし、キスもハグも、あわよくばそれ以上も……」

「契るの？」

ザーツと流れる水音が気になったけど蛇口が一輪の奥にあったから、能力を使って流れを止めた。

一応、頑張れば水を操ることもできる。うん、こうすれば一輪の聲がよく聞こえる。

「そう、ね……肉には逆らえないから」

「戒律は？ 経典には禁欲って書いてあるわ」

「姐さんは中道を推してる。快樂も禁欲もほどほどに、真ん中を、つてね。言い方は悪いけどその方がいずれは檀家が増えるわ」

「女同士だなんて非生産的……」

「それがどうも、この世界じゃ必ずしも非生産的じゃないみたいで。はははは！ 不思議な世界よねえ」

珍しく大口を開けて笑う彼女に、呆気にとられる。ぽかんと間抜け面だったのだろうか。おでこを突かれてしまった。

たしかに、恋仲だと言われている少女達をたくさん目にする。寄り添って、幸せそうな姿をよく見る。

それらを私には関係のないことだと思って、見ていた。

「心があるから。愛してるって思うから、私は姐さんが好きでたまらないのよ。今でも十分だけど」

「一輪てば妖怪なのに人間みたい」

「ムラサもいずれ分かるわ」

くすくす笑う一輪には、馬鹿にされたって思わなかった。どうしてだか、アイツにだけはいつもイライラする。疲れちゃう。

とにかく分かったことは、人間も妖怪も案外違わないのかもしれない、ということ。

どっちも複雑で面倒な感情を持った生き物なのね。

『あなたにこの船を与えましょう。あなたは私のために働くのです。誰かに必要とされるのは何て嬉しいことなんだろう。自分の怨みひとつで現世に留まって、恐れられ、妖怪となった私には縁がなかった。』

恋も愛も知る前に死んでしまった。それを聖に救われて。この人についていこうと思った。私の希望だった。

こんな私を赦して必要としてくれた。だから恩義に報いるために今日も今日とて、

「ぬえー、いい加減に起きなさい。ご飯冷めちゃうわよ！ もう冷めてるけどー！」

コイツの布団をひっぺがすのです。

「あー……おはよ、ムラサあ」

「さっさと起きる。私はアンタの母親じゃないのよ」

「キスしてくれたら起きる」

「意味分かんない。訳分かんない」

起こそうと引つ張ったら、逆にコイツに引つ張れて布団に突っ伏してしまった。

獣臭い布団。ぎゅっとしがみつかれて、羽も使って拘束された。私

のイライラは一気に募り、さつきまでの幸せがチャラになる。

「ムラサあ、好きだよー」

「聞き飽きたわ。つまんない」

「本当だつてば。キスして、ね、ね」

「キスは『すき』な人としかしません。ほら起きる、馬鹿ぬえ！」

文字通り、叩き起こす。これがお遊び終了の合図で、それ以降はちやんと起きる。

毎朝このやりとりをするのは少し疲れるけど、仕事として捉えるならばかなり簡単な部類。

あとは朝食を整えてやって、その間に掃除と洗濯。食べた頃合を見計らって後片付けをしてから昼食の準備にとりかかる。

だいたい毎日同じパターン。今日はおうどん湯がいて釜玉にしよう。つるつると喉を通る湯で加減にすればいい。

薬味はしょうが、みょうが、ねぎを刻んでおこう。付け合わせはささ身とチーズを海苔でくるんで揚げればいいかな。ナズが喜ぶに違いない。

「私行くわよ」

「待ってムラサ、すぐ着替えるから」

コイツはいつも、やけに私と一緒に行動したがる。普段はふらふらと遊びまわってるのに私を見つけるとべったりくっついて離れたがらない。

まるで聖と一輪みたい。泣きじゃくる子供みたいで鬱陶しいというのが本音だったり。だけど、それが嫌じゃなかったり。

……あれ？ まさかね。

「明日は早く起きようかなあ……」

後片付けに訪れた食卓にて、ぼつりつぶやくアイツが麦茶を注ぎながら話しかけてくる。

「どうして？」

「だって明日は甘い卵焼きでしょ？」

「そう、ね……アンタもたまにはみんなと一緒に食べたらいいわ。片付け2回しなくて済むし」

一人で食べるご飯なんて美味しくないだろうに。頬についた米粒をとってやりながらそんなことを考える。

大人しくしてれば可愛いのにね。ぎゅむぎゅむと頭を揉んでみた。

「……ムラサ？ 何してるの？ 痛い」

「あー、カタチのいい頭だなあと」

「どうせなら頭撫でて欲しいなーって思ってみたり」

「いやよ」

「んーじゃあ爪塗って欲しい」

「マニキュア落としたの？」

「だって黒いの嫌って言うてたからさ」

にひひと笑う口の、真っ白い牙が今日は可愛く思えた。

「これ終わったら庭の手入れ手伝いなさいよね」

「分かったって」

二人向き合って、猫背になりながらマニキュア塗り。爪が見えやすいように顔を近づける。

私より小さな手に、長く整えられた爪が並んで何だか嫉妬でも伸びる前に噛んじやう私には無理だからという無いのもねだりであって、これは決してコイツが羨ましいとかじゃないのだ。

「ハケを縦に動かしてね。一方向しかダメだよ」

渡された目に毒々しく、鮮やかすぎる色の小瓶が、魔女から差し出された毒瓶みたいってメルヘンな思考に陥ってぐるんぐるん。

これの蓋を開けたらどうにかなっちゃんじゃなかるうか。イライラ爆発とか？

ハケに液を含ませて、爪に乗せる。そのまま縦に動かせばスツときれいに伸びる。塗ってくたんびに、真紅に色づく。

唇、舌、コイツの瞳。全部が赤。目に悪い、心に悪い。頭の中につまでも残ってふとした時にコイツの笑顔ごと鮮明に思い出しそう。

「ムラサはさ、私の気持ち、受け取ってくれないの？」

「……なにが」

「好きなんだってば」

「意味分かんない」

「それは『好き』って意味が？ 私がムラサのこと好きってことが？」

ハケを動かして赤を重ねる。二回塗った方が発色がいいって教えられたから。

「本気だよ、私」

「……動かないで。塗るの初めてではみ出ちゃいそうだから」

「何が不満なの、性別？ 種族？ それとも戒律？ はぐらかさないで、いっぺんちゃんと考えてよお……」

「……… 一方的な感情を押し付けしないで。理解の範疇を超えるわ。あと聞き飽きた」

「私にはムラサが必要なの！」

必要とされるのは嬉しいこと。喜ばしいこと。存在証明と存在意義があるっていうのはとってもステキ。

コイツなら好きの意味、ちゃんと教えてくれるのかしら。ピンからキリまで、いろはにほへと、私が知らない感情を。

「迷惑かな……ムラサ？」

ああ こういう、しおらしい顔もできるのね。面構えは嫌いじゃない。むしろ好きな部類だったりする。

つややかに濡れた唇なんて、すんごく魅力的。私にだけしか紡がれない言葉が嬉しい反面、とつてもうるさい。塞いでみたいと、思ったりね。

「迷惑って言ったら、それは嘘になるわね。はい。両手塗れました。動かないように」

「ムラサはずるいよお……… どうせ私置いてきぼりにして、庭の手入れいっちゃんうんでしょ？」

泣きそうな顔で見つめられて、立ち上がりかけた足を元に戻して腰を落ち着ける。草むしりの真っ盛りにはまだ程遠い。

木の枝だつてそんなには伸びてない。ちよつとくらい休憩してても誰も怒りやしないだろう。

それに、たぶん、コイツを置いて一人で行く方がきつとイライラす

る。

「んー…ぎゅむっ」

「ちよっと…何してるの？」

「分かんない。ぬえのぺちゃんお胸、ぱすぱす」

そのあとマニキュアが乾くまでずっと抱き着いていた。柔らかい、あったかい。前回の仕返しをするには丁度いい。そうね、私はコイツのこと、好きだったりしてね。

まさかね。だけどそのまさかがあり得えちゃったり、ね。

そつだ、牛乳を飲もう その3

朝はすんごく早いけど、実は夜寝る時間はそんなには早くなかったりする。かといって夜更かもしもない。

その日のうちに就寝、というのが暗黙のルールだったりする。まあ、お酒飲むときは破っちゃうんだけど。

私は一人で黙々と就寝前の写経に勤しむ。文字を書くという単純作業と墨のにおいが上手い具合に眠気を誘ってスツと寝付けるから。だから仏様には悪いけど心身をすっきりさせてるわけでもないし、内容もあんまり頭に入らない。聖、ごめんね？

しばらくすると障子の向こうから遠慮がちな声が聞こえて、

「ムラサいる？」

「あとちよつと……」

「写経？」

「うん よし。入っていいわよ」

枕を抱えたヒマ妖怪がやってきた。

「ムラサあー……」

「これはこれは夜遅いおでましで」

「えつと……一緒に寝ていい？」

「なんでよ」

「一輪の甘い卵焼き出来立てで食べたいから明日は早起きしたい。でも寝付けなくて……」

「何度も言うけど、私はアンタの母親じゃないのよ？」

「知ってるよ……」

「自分の部屋もらってるでしょうが」

「でもお……！」

「……………」

小さい子をいじめているような気分になったから諦めた。うつむいて、枕を握り締めている。頭のアホ毛はぺしゃんこだった。

「しょうがない。せめて布団も持ってきなさい」

「うえー…だつて部屋一番遠いじゃん」

「それくらい何とかしなさいよ。私もう寝るからね」

「やだやだ、だつたら一緒に布団で寝ればいいでしょ！ まだ夜中ちよつと寒いし！」

文机をどけて一組の布団を敷く。毛布はこの前、押し入れの奥底に突っ込んでしまった。

たしかに最近また寒さがぶり返ってきて夜中に布団を引っ張り上げる、というのも少くない。

昼間の、抱き着いたコイツのあったかさを思い出して心がぐらぐら揺れる。

天然のカイロは嬉しいけど、でもこれってどうなの自分。下手したら夜這いじゃないんだろうか？

「ムラサあ…ぐすん」

……うん。コイツにそんな度胸があるとは到底思えない。

妖怪としてどれだけ生きてるか知らないけど、生活の節々から鑑みて、どう考えても私より子供だもの。

「おいで。特別に入れたげる。この貸しは高くつくわよ」
「やったー！」

一組の布団に枕が二つ。みょうちくりんな夜になる予感。反対向いて寝よう。こら、あんまりひつつくなってば！

「寒い…」

風が吹いて戸が揺れる。ガタガタいう音が怖くてコイツの方を向いたら、口開けて寝てた。

コイツ……寝付けないとか言ってたくせに私より先に寝やがった。ぐっすり幸せそうに寝息を立てて、無防備な姿勢晒しちゃって。おまけにヨダレまで。気が抜けた。なによ、なによ。いっそのこと私の恐怖心を返して！

この際だからじろつと観察してみようかしら。

前髪が顔にかかって寝顔がよく見えない。

だからかき上げて顔を覗き込む。閉じられた目があった。

伏せられた長いまつげが僅かに震えている。

シミ一つない白い肌によく映える。私も地底がだいぶ長いから白いけどね。

まぶたの下にあるだろう赤い瞳をイメージする。

コイツが私だけを見て私にだけ呼びかけて……うん、悪くない。

口元に手を当てて呼吸を確かめ、完全に寝ているか確認した。呼吸の乱れはない。完全に眠っていた。

起きていれば自分勝手いい加減なことばかり言う口が、黙っていれば憎たらしいほど可愛く見える。

くつつきたいって、触れたいって、思った。だからね。

キスしてやった。
ほっぺたに。

赤い唇、赤い舌。
赤い瞳に赤い爪。

それと一緒に鮮烈な笑顔を思い出す。あれは、馬鹿にしてたんじゃなくて、このマニキュアが私に似合っつていう本心からの笑みだったんじゃあ。

『私のこと見て』って言ってた。私はコイツをきちんと見たことがあつただろうか。
コイツの言うことを頭ごなしに否定して、聞かなかったことにしていなかっただろうか。
好きって何度も言ってくれた。たぶん、本心から。だけど私はひとの言葉を信じるのが怖いから。嘘をつくのは、いつも口。

「アンタは、嘘つかない？」

寒くて寒くてしょうがなくて、布団に潜り込んで、さらにコイツの腕の中に潜り込んだ。あつたかくて安心して。
ぶるりと身震いひとつして、私は目を瞑った。

翌朝、私は寝坊した。

「一輪、何で起こしてくれなかったの!？」

「だってぬえと抱き合って気持ちよさそうに眠ってたから、起こしちゃ悪いと思ってる」

「卵焼き……!」

「そつち…? まあ心配しないで二人だけに新しく作ってあげるから」

「みんなにも謝んなきゃ……」

「そのことなただけ。姐さんが今日は休んでいいって言ってたわよ」

「え……?」

「毎日一番に朝のお勤めの準備してくれてるのがムラサだったから、そろそろ交替しましょうって。で、今日はボーナスのお休み」

最後に寝坊したのっていつだっけ。こんなにぐっすり眠ったのは久しぶり。不意だけどアイツの腕の中は心地よかった。

意識が浮上しかけてもまだまだココにいたいと思ってさすがのようにむぎゅっとひつついて深呼吸して再び眠ってしまった。

ああ恥ずかしい。体温や鼓動なんか気持ちよくなって私を二度寝へとたぶらかした。あつたかぼかぼかだった。さすが動物、平熱が高いのね。

らしくないことが続いているように思う。でも、私らしさってなんだっけ。まっすぐに、清く正しく、真面目に。

図々しいし悪戯っ子だけど、嘘はついてないはず。なによりも、あの暖かさは信じてみたかった。

忘れられそうになかった……悔しいけど。

二人つきりで、ちょっと遅めの朝食。

いつもよりかは随分と早く起きたコイツは、一輪が作り直してくれ

た甘い卵焼きをつつつきながら大あくびをしている。
牙が見えて、さらにピンクのベロまで見えた。嘘つきは閻魔様に引
っこ抜かれてしまうというのは本当なのかしら。

「ぬえ！……私のこと、ほんとに好きなの？」

「あと何万回言ったら信じてくれるの？ もつずっと言ってるじゃ
ん」

コイツは私に、「好き」と言い続けてる。それは終始一貫していて
歪まない。

そろそろ私もこの子を信じてあげる時期なのかも。もしも嘘なら、
私が引っこ抜いてあげればいいんだし。

「これから生活改善してくなら、考えて、あげる……」

「！？」

「悪いけど、言葉は信じられない」

「ムラサ、私、頑張るよ……！」

「私も、がんばってみるから」

「？」

それから何故か毎晩一緒に寝るようになった。

最初はすんごく嫌だったのだけど、コイツは夜に眠るようになり、
その結果朝も起きられるようになった。

朝食をちゃんとみんなで食べられるようになった。コイツも嬉しそ
うだったし、聖が喜んでいたのが嬉しかったな。

昼夜逆転の、妖怪そのものの生活リズムが整ってくる。おまけに寺
の手伝いをするようになった。

なんだ、やればできるじゃん。正直助かる。

私はアイツの爪みたいに出来ないのが口惜しいから頑張って伸ばし

始めた。

噛みたい衝動はアイツと接していない時に強く起こるようになった…… おかしいな。

だからイライラしないように、気休めかもしれないけど牛乳をたくさん飲んだ。

そしたらだんだん改善されていってイライラすることも、爪を噛むことも少しずつ減っていった。

おまけに背が伸びてアイツとの身長差は開いたし、胸も大きくなつたような気がする。ちょっぴりだけど。どっちも、とっても優越感。

「好き」という言葉を何度も聞いた。繰り返し、繰り返し、耳に残るくらいに。

「ほんとに好きなら自分で自分の腕、噛み千切ってみせてよ」とけしかけたら本当にしそうになつたので慌てて止めた。

一騒動終わってから、私はとてつもなく後悔した。操縦はしてもいい。曲がりなりに船長だから。

でも。弄んだらダメだ。ヤツは真剣なんだ。こんな私なんか……馬鹿な子。

きつと、根はまじめでいい奴なのよね。悪戯といつても人に危害を加えるわけでもなし。本当に嫌がることをするわけでもなし。

まったくもって聞き分けがないわけでもなし。うまく操縦してやればいいのだ。なんだ、簡単なことじゃないか。

ちよっかい、世話焼き、おせっかい。全部全部、私のためにしていたんじゃないのかしら。分かりにくいよ、馬鹿。

そうだ、牛乳を飲もう その4

まどろんで、世界が反転した。
深い眠りの淵で何かに呼ばれた。

紺碧の水面に投げ出され真つ逆さまに落ちていく。遠くなる光をぼんやりと感じて弱々しく手を伸ばした。

水流が大きな渦を描いて飲み込まれる。引き摺り込まれる。もう泳げないよ、体が重い。

苦しい、苦しい、いやだ、死にたくない、まだ死にたくない……。口を開けば器官に水が入り、どんどん重くなっていく。呼吸が止まる。

やりたいこといっぱいあるのに、苦しいよ、いやだよ、どうして私がかんな目に、誰か、誰でもいいから助けて……！！

「ムラサっ！！」

かはつと一つ呼吸をして、私は目を開いた。見慣れた部屋とおかしな顔のコイツがいた。なんで、そんな顔してんのよ。

「あ、はははははははははは！！！！！！」

笑いが止まらない。変な顔。整わない呼吸で無理やり息を吸って一気に吐き出す。

大きな空気のかたまりを吐き出したら肺がぺしゃんこになって、もう声も出なくなった。

酸素が足りなくて肩で息をしたら、なにかが喉に詰まったみたいになって動けなくなってしまうた。

「はは、はっ、は……」
「無理しないでいいよ」

目を掬われた。濡れていた。ひゅうひゅうと息を吸って考える。そっか、私、夢を見てたんだ。怖い夢を見た。自分が死ぬ夢。いつまでも終わらない悪夢が延々とループする。いつもなら息絶える間に聖が出てきて救ってくれるのに、この日は来なかった。

「無理しないで、いいからね。私と一緒にいるから、さ……」
「ん……」

伸ばされた手は、大きくはないけど優しく、あたたかかった。すっとまぶたを押えられて目をつぶる。

恐ろしい心象がフラッシュバックしやしないかと恐ろしくてたまらないから手を掴んで、握った。握り返され、脈拍を感じた。どくん、どくん、と。

それに反応するように自分の手のひらも脈打ち、このあたたかい手をきゅっと握った。すぐそばに、コイツがいた。

本当は寂しい、のかもね。怖い、んだと思う。あたたかい、優しいのが欲しいの。

必要とされたい。離さないで。

泣きじゃくる子供は私の方だった。

何かが壊れて溢れて、吹っ切れて、そんな自分に呆れた。当の昔に

分かりきったことを、目隠しでもしていたのかしら。馬鹿な私。ボケボケしてらんない。書物で勉強してみた。分厚い本をめくる。ぺらり、ぱらり。ひたすらめくる。何が書いてあるのか分からない。そもそも読めない。ただ、どうやら外の世界の言語は統一されていないようだ。

きつとこうやって国々独自の言葉に変えてゆく過程で言葉の輪郭が薄れていって本当に大切なことを忘れていってしまうんだと思う。言葉は飾りだから。騙れてしまうから。だから、もっと、ずっと心に響く、簡単なやつがいい。

「あ……これ、いいかも」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8030y/>

東方稲子神

2011年11月26日23時52分発行